

# 予期の構造と言語理解 ——生態心理学の観点から

仲本康一郎, 井佐原均  
独立行政法人 情報通信研究機構(NICT)  
{inaka, isahara}@nict.go.jp

人間は物事の先を読む。世界に対するこのような志向性の問題は<sup>1</sup>, 言語学のなかであらためて議論されることは少ない。本稿は, 生態心理学の知覚・行為観に立ち, 従来主観性の問題とされてきた表現を再考し, それらが予期の構造という認知構造と相対的に理解されることを主張する。

具体的には「危ない」に代表される表現を中心に, ①主体が未来の状況を予期する際, どのような環境の情報が利用されるか, ②予期を表わす表現に主体の感情的な態度がいかに反映されるか, 最後に, ③予期を表わす表現がどのような伝達行為として発話されるかを考える。

## 1. 生態心理学の知覚・行為観

生態心理学は, 人間を含めた生物を刺激に対して反応するだけの受動的な存在としてでなく, 環境のなかの情報を能動的に探索し, 今後起こりうる環境の変化にあらかじめ対処する主体=エージェントとみなす。また, 環境のほうも無秩序な世界でなく, そこで生きる生物の活動と相対的に構造化されていると考える ([2][3][4])。

以下は, 生態心理学が考える生物の知覚・行為観である。第一に, 知覚は行為とカップリングされている。本稿は, 危険の知覚と行為の意図がカップリングされていることを主張する。第二に, 世界の知覚は自己の状態に関する知覚と相補的に生じる。本稿は, 危険は外界の状態であると同時に自己の状態であることを主張する。

<sup>1</sup>「いかなる意味理論も、人間の理解に言及する志向性の理論に基づかないかぎり、適切である見込みがないことになる」([1])。

## (1) 生態心理学の知覚・行為観

- A. 知覚と行為のカップリング
- B. 世界の知覚と自己の知覚と相補性

## 2. 1. 生態学的事象

われわれの環境はいつでも何が起こるかかわからない不安定な世界でなく, 自然の周期的な変化や人間の文化的な慣習, 意図的な活動の計画によって構造化されており予測が可能となっている。事物が空間を構造化するように, 出来事や事象は時間を構造化し秩序を与える。

時間を構造化する生態学的事象として, 順序, 可逆性, リズム, 頻度などがある。また, 事象は環境に対して徴候や痕跡といった変化の証拠を刻み付ける。このなかで未来の徴候はひとが将来の変化を予期するときに利用する環境であり, 天候や表情, 姿勢などが利用される。

## (2) 徴候的情報 (symptoms)

- A. 定義: 予期を可能にする環境の情報
- B. 具体的な環境: 天候, 表情, 姿勢, ...

## 2. 2. 徴候と予期

現在の状態を未来の出来事の徴候として表現するものとして, 日本語のアスペクトやモダリティ表現がある。例えば, 倒れそうな木を表わす表現として, 以下のような表現がある。これは現在の状態から木が倒れるという未来の出来事を予期する表現であり, そこでわれわれは徴候という環境の情報を利用する。

- (3) a. 木が倒れよる : アスペクト表現
- b. 木が倒れそうだ : モダリティ表現

「木が倒れヨル」という表現は、西日本方言で動詞の進行形を表わすものであり、持続的な過程を持たない場合、出来事への近接性を表わす ([5])。予期はいまだ存在しない未来の予測であり本来的に“虚構的”であり、主体の推測を直接的に表わす「そうだ」や「かもしれない」のようなモダリティ表現によっても表わされる ([6][7])。

→徴候や予期は形容詞によっても表わされる。

## 2. 心配性の言語学

池田は社会心理学の観点から火事や地震などの緊急時の人間の行動を調査し、人間は完全な合理的存在でもなく、かといって容易にパニックに陥る存在でもない「可能なかぎり積極的に情報を探索し先を読んで判断を下す」ソフトな意思決定者という人間像を描いている[8]<sup>2</sup>。

### 3. 1. 予期の構造

池田によると、人間の予期は状況に対する制御(=コントロール)の可能性という観点から大きく三つに分類される。われわれは火事や地震などの状況を切り抜ける際、これらの予期を相互に関連させることで適切に対処するという。

#### (4) 予期の類型

A. 状況予期：現在の状況は今後どう変わるか  
B. 行為予期：主体の関与で状況はどう変わるか  
C. 可能予期：主体の行為は現段階で実行可能か  
まず、放っておくと状況はどう変わるかという外界の変化に関する状況予期がある。また、もし主体が環境に働きかけたとき状況はどう変わるかという自己の行為に関する行為予期がある。さらに、それら二つの相関として自己の行為は実行可能かという可能予期が提案されている。

池田のいう予期の構造が興味深いのは、様々なタイプの予期が状況のみによって受動的に喚起されるのではなく、行為=意図を入力とした結果生じるという点である。これはひとが状況を配慮すると同時に自己を配慮することに基づく。

例えば、「この橋は危ない」のような文を考えてみると、橋が危ないという状況把握と同時に自分が危ないという自己把握が同時に働いている。

(5) a. この橋[=状況]は危ない (→落ちる)

b. わたし[=自己]は危ない (→怪我をする)

これは世界の知覚と自己の知覚が相補的であるという生態心理学の考え方と一致する。また、危険の知覚は多くの場合、エージェントがその橋を渡るといった未来の行為が前提となっているという意味で能動的であるといえる。

(6) この橋を渡るの[=行為]は危ない

### 3. 2. 不安予期に基づく語彙

未来に対する予期を大きく未来の状態の到来を期待する期待予期と、そのような状態の成立を恐れる不安予期に分類すると、「危ない」は未来に起こる状況を憂える“不安予期”に基づく判断を表わすことに気づく。

例えば、株の投資家が (7) のような表現を用いた場合、(8a) のような解釈は自然であるが、(8b) のような解釈は不自然である。

(7) この株は危ない

(8) a. この株は [下がるかもしれない]

b. ?この株は [上がるかもしれない]

(9) 「危ない」の基本的意味：

状況予期：出来事Eが起こる可能性がある

評価類型：出来事Eの成立はのぞましくない

このような「危ない」の意味の背後にあるのは、放っておくと事態は悪化するという未来に対する不安や心配といった態度である。このような心理的な態度に基づく予期の表現は日本語において豊富に語彙化されている。

<sup>2</sup> このような発想は人間の合理性は限界合理性 (bounded rationality) であるとするシステム論の考え方に通じる ([9])。

以下に、「危ない」と同様の性質を持った表現を挙げた。大きく予期の形容詞は、不安系の予期と安心系の予期に分類される。これに対し、未来の到来を期待する期待予期の形容詞(例. 有望な)は少なくその対義語はさらに考えにくい。

「危ない」という形容詞の対義語として「平気だ」や「大丈夫だ」などの表現が考えられるが、これらは積極的に未来に起こる事態を期待しているのではなく未来について不安を持つ必要はないという消極的な意味を持っている。

(10) 不安予期に基づく形容詞

- a. 不安：危ない，大変だ，まずい，やばい
- b. 安心：安全だ，平気だ，大丈夫だ，心配ない  
→「不安の不在」という消極的な期待

こういった(日本語に観察される)語彙化の傾向は何を意味するのであろうか。以下、これらの形容詞に関連する構文現象を考慮に入れることで、不安予期に関する表現が発達している理由を考えてみたい。

4. 不安予期に基づく構文

未来に対する不安や心配といった予期の傾向は日本語の語彙だけでなく、時間や条件に関する構文現象としても観察される。以下では、不安予期に基づく構文として日本語の P ウチニ Q と P テハ Q という二つの構文を取り上げる。

4. 1. 時間構文

時間的な順序を表わす表現のなかで、P ウチニ Q という構文は不安予期がその背景にある。まず、この形式は空間的なウチとソトという対立に基づくものであり、未来=ソトに対する現在の状態 P =ウチとして把握される ([10])。

例えば (9) のような発話は (10) のような事態の悪化に関する予期が前提となっており、放っておくと事態は悪くなるという予想が働いている。

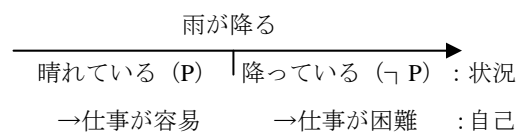
- (11) a. 明るいうちに峠を越えたいものだ
- b. 若いうちに勉強しないと後悔するよ

- (12) P (内) (外) ¬ P
- 明るい → (暗くなる) → 暗い
- 若い → (老いる) → 老年

この形式が持つ含意として「P がそれに対立する ¬ P に移行したとき、[行為が]実現可能か、困難になる」という指摘がある。つまり、危険は単なる外界の常態でなく、未来における主体の状態を考慮として概念化されている。

例えば、次に挙げた例 (11) は (12a) のような未来に対する状況予期と (12b) のような可能予期との関連で理解される。

- (11) 晴れているうちに仕事をしよう
- (12) a. [雨が降ってくる]かもしれない
- b. [仕事が困難になる]かもしれない
- (13) P ウチニ Q と予期の構造



4. 2. 条件構文

日本語の条件文は多様であり、ひとつひとつの条件文が構文として特徴的な制約を持って用いられる ([11][12])。本稿は、そのなかで予期に関連の深いテハ条件文に注目しその背後に働く予期の傾向を指摘する ([13])。

● 前件の事態=出来事 event の場合

テハ条件文は前件の事態が出来事の場合、その出来事の生起によって負の結果が引き起こされるという状況予期を表わす。また、これが対人的な場面に用いられるときは、そういった予期に基づく警告として解釈される。

- (14) a. 雨が降っては仕事ができない
- b. ? 雨が降っては仕事はかどる
- Cf. 雨が{降れば, 降ると}仕事はかどる
- (15) 雨が降っては{大変だ, まずい, やばい, ...}

## ● 前件の事態＝行為 action の場合

テハ条件文は前件の事態が行為の場合、そのような行為によって何らかの負の結果が引き起こされるという行為予期を表わす。また、これが対人的な場面に用いられるときは行為予期に基づく禁止として理解される。

(16) a. 暗い部屋で読書しては目を悪くするよ

b. ?明るい部屋で読書しては目が良くなるよ

Cf. 明るい部屋で読書すれば目が良くなるよ

明るい部屋で読書したら目が良くなるよ

(17)暗い部屋で勉強しては{いけない, ならない}

## 4. 3. 構文文法から見た人間の認知

語彙や構文の意味や用法は日常生活で頻繁に生じる場面が基盤となるという主張に立つならば ([14][15]), 少なくとも日本語に関するかぎり予期という現象は未来に対する不安や心配をベースに構成されていることがわかる。

こういった現象に対する説明は恐らく言語学を超えるものであり、行動生態学や生態心理学などによる説明を要する。恐らく人間＝生物は危険に対してあらかじめ対処することで、より適応的な行動をとることができるからというものであろう。

## 5. まとめと展望

本稿は、まず予期に関する言語現象を観察することで、われわれの予期が感情や評価と無関係な純粋に合理的な推論ではなく、われわれの身体性に基づく危険や安全といった状況の評価的な定義に基づく推論であることを明らかにした。

また、ひとは予期された情報の伝達において、いかに対処すべきかという警告や禁止という意味を込めることを観察した<sup>3</sup>。このような事実は、意味という現象を主体の概念化とみなす従来の意味論の分析を超えるものであり、今後行為レベルを考慮に入れた分析の必要性を示唆するものである。

## 参考文献

- [1] Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- [2] Gibson, James J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton.
- [3] 佐々木正人. 1994. *アフォーダンス*, 岩波書店.
- [4] 本多啓. 2005. *アフォーダンスの認知意味論*, 東京大学出版会.
- [5] 工藤真由美. 1995. *アスペクト・テンス体系とテクト*, ひつじ書房.
- [6] ケキゼ・タチアナ. 2000. 「「(～し)そうだ」の意味分析」, *日本語教育*, No.107, 7-15.
- [7] 森山卓郎. 2002. 「可能性の周辺」, *日本語学*, Vol.21, No.2.
- [8] 池田謙一. 1986. *緊急時の情報処理*, 東京大学出版会.
- [9] Simon, Herbert A. 1957. *Administrative Behavior*.
- [10] 寺村秀夫. 1983. 「時間的限定の意味と文法的機能」, *副用語の研究*, 明治書院. [寺村秀夫. 1993. *寺村秀夫論文集 I*, 127-156. に再録.]
- [11] Fillmore, Charles J. 1987. "Varieties of conditional sentences," *Proceedings of the Third Eastern States Conference on Linguistics*, Ohio: Ohio State University, 163-182.
- [12] 藤井聖子. 2002. 「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐる」, *対照言語学*, 249-280, 東京大学出版会.
- [13] 蓮沼昭子. 1987. 「条件文における日常的推論」, *国語学*, No.150, 1-14.
- [14] Goldberg, Adele. 1995. *Constructions*. Chicago: Chicago University Press.
- [15] Hopper, Paul J. & Elizabeth C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [16] 赤塚紀子. 1998. 「条件文と Desirability の仮説」, *モダリティと発話行為*, 1-97, 研究社出版.

<sup>3</sup> 同様の観察は赤塚の論考にある[16].